

# コミュニケーションデザインによる寺院の再出発

-法話に注目して-

## Reviving the Temples through Communication Design

- Focus on Buddhist Sermon -

### ■ 田中 杏佳 Kyoka TANAKA

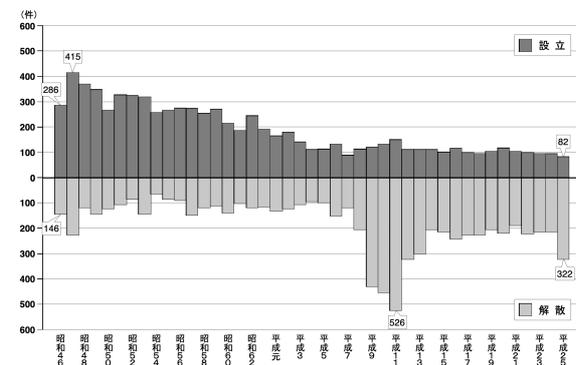
愛知県立芸術大学大学院 春田登紀雄研究室

*Aichi University of the Arts*

### ■ キーワード：寺院、コミュニケーションデザイン

#### はじめに

2021年の時点で、寺院は全国におよそ 77,000 存在する。そのうち住職のいない空き寺は 17,000 近くに及ぶという調査がある[図 1]。



大衆の前で行われる法話では必要でない場合が多い。僧侶は、時にカウンセラーとしての役割もあり、学校、職場、健康、金銭、人間関係などに関するアドバイスをすることも多い。

もちろん、精神科医などの医療専門職とは異なり、医療行為ではないために保険の適用はない。あくまで、仏門に入って修行を積んだ僧として、人助けを行っているのである。故人や今を生きる人、生活に悩みを抱え苦しんでいる人の心に寄り添い、気持ちを和らげることが、僧侶たちの仕事である。しかし、寺院は対話を前提としていたが、現代のほとんどの寺院は地域との繋がりが弱くなっている。そのうえ、今まで必要のなかった興味や関心から信頼までの流れを作る実践的知識がない。そこで、心のよりどころとなるための対話の実現に向けて、広告コミュニケーションにおける態度変容モデルを参考に、寺院用の5つのフェーズを作成した[図2]。



図2 対話までの5つのフェーズ

## 2. 検証1

悩みに対して「アドバイスがほしい」「ただ聞いてほしい」「うまく話せない」「あまり知られたくない」などと、人によって要望は様々である。寺院が人々の心のよりどころになるために、興味・関心から信頼まで結びつける検証を行った。

はじめに、展示と3つの手法を検証した。仏教の教えに基づいた住職たちの考え方を12種類選び、カードにして展示した[図3]。

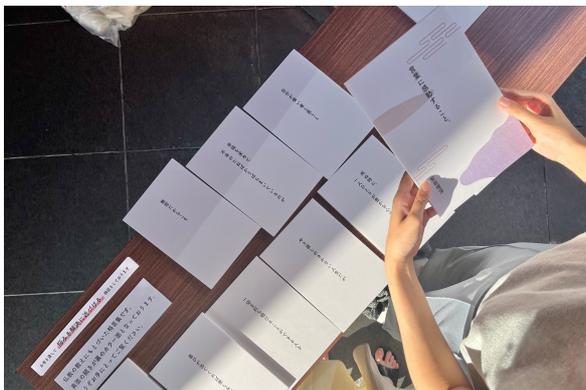


図3 展示の様子(2024/7/28 大光院にて)

12種類の言葉は、以下である。

1. 自分が偉い者と思うと世の中が暗くなる。/曾我量深(真宗大谷派僧侶)
2. 一日の空過はやがて一生の空過になる。/金子大榮(真宗大谷派僧侶)
3. 純真だけれど無反省な人がいる。/毎田周一(仏教思想家)
4. どんな現実の難関にあっても耐えていける人間を生み出す。それが仏法である。/安田理深(仏教学者)
5. 幸福を求めて不幸のたねばかりばらまいているのが今の

世。/宗正元(仏教学者)

6. 喜びが出てくれば悲しみがなくなるというようなものではない。/金子大榮(真宗大谷派僧侶)

7. 他人の心を知ることは何でもない。自分の心を見ればよい。/毎田周一(仏教思想家)

8. 死ぬ時に、一人ひとりが豊かな心で死ぬる社会が本当の豊かな社会。/宮城顕(本福寺前住職)

9. 無常だからこそ今日一日がありがたい。/伊奈教雄(安楽寺前住職)

10. 仏教にいちばん大事なことは言葉に感動すること。/安田理深(仏教学者)

11. 一切を打ち明けることができる人を一人もてたらよい。/高光大船(専称寺前住職)

12. やり直しのきかない人生が見直すことはできる。/金子大榮(真宗大谷派僧侶)

上記から悩みに効果的なものをそれぞれで取捨選択してもらった[図4]。



図4 カード

次に、「書いて発散」「手紙で会話」「住職と対話」の3つの手法で検証を行った。

### 2.1 「書いて発散」

一つ目の「書いて発散」では、話しづらいことや発散したいことを言葉にすることで、自身の状況を客観視できることを目指した。悩みや問題、今の感情、最近のこと、検証に対しての感想など参加者に自由記述を依頼した。

これは、一方的に書くだけで、住職からの返答は特になく[図5]。



図5 検証の様子(2024/7/28 大光院にて)

### 2.2 「手紙で会話」

二つ目の「手紙で会話」は、相談するほどではないが、共感してほしいとき、誰かの意見がほしいときに、住職が返答するものである。ここでは、相談したいこと、聞いてみたいこと、なんとなく話したいことなど自由記述を依頼した。この手紙では1ヶ月後に住職の返答が得られるようにした[図6]。



図 6 検証の様子(2024/7/28 大光院にて)

### 2.3.「住職と対話」

三つ目の「住職と対話」では、悩みごとを打ち明けたい、誰かと直接話したい場合に住職と対話できるようにした。深い悩みや伝えづらいことを対面で話すことができるというメリットがある。人々の悩みや問題を解決するのではなく、寄り添い、内省を深めることが目的である[図 7]。



図 7 検証の様子(2025/4/28 大光院にて)

### 2.4.効果

被験者側からは、「生きがいが無い」「話せる人がなかなかいない」「思いつく悩みが特にならない」「なんとなくストレスを感じる」「話し足りない」といった課題に対して、「お寺の住職の言葉は響く」「参考になった」「少し発散できた」「仏様にならなんでも言える」といった感想が得られた。

主催者側からは、「悩みを吐き出すハードルを下げたい」「周りには話しづらい悩みを救いたい」「やりがいを感しない」といった課題に対して、「少しでも力になれば住職として嬉しい」「参拝者に寄り添えて嬉しい」などといった感想があった[図 8]。

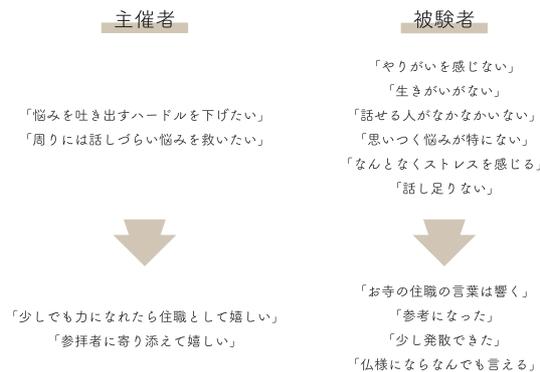


図 8 検証前後の認識の変化

思考が整理できない、悩みを言語化できない、相談相手の適正確認、正しい判断がもらえるかわからない、機会がない、相談できることを知らない、といった悩みが、コミュニケーションデザインを導入したことにより、悩みが明確でなくても客観視できる、仏教だとうこう考えるという指針がわかる、今の自分

に必要な情報が見つかる、といった形で解決に近づけることができた。

### 3.検証 2

次の検証では、「お寺の問診票」を用いて検証を行った。イラストから入り、お金、健康、仕事、学業、自分、家庭、人間関係などを示し、診察のような形で人物の絵に丸をつけてもらった。ジャンルに分けて選択肢を出し気になりやすい内容を可視化したことで、ぱっと思いつかない、悩みをうまく言語化できないなどの課題が改善された[図 9]。

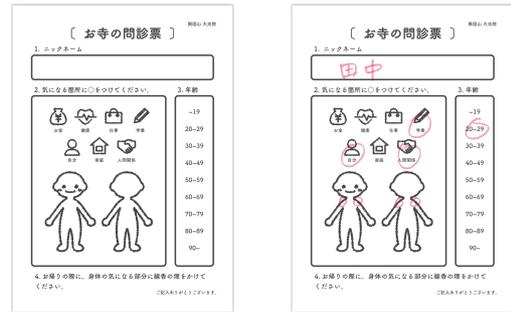


図 9 お寺の問診票

2025 年度では、毎月の縁日の検証に加えて盆の墓参り、精霊送り、施餓鬼などの日程に合わせて検証を行った。

2025 年 8 月 15 日に行った精霊送りとは、盆に迎えた先祖の霊を見送るための伝統行事である。50 件近くのお供物を預かり、大光院で供養した[図 10]。



図 10 検証の様子(2025/8/15 大光院にて)

2025 年 8 月 17 日に行った施餓鬼とは、飢えに苦しむ霊に食事を施し、生命への感謝と慈悲の心を広げることを目的とした法要である[図 11]。



図 11 施餓鬼の様子(2025/8/17 大光院にて)

読経と焼香を終えたのち、住職による法話が行われた。ここでは檀家約 40 名が来訪したため、検証への協力を得た[図 12]。



図 12 検証の様子(2025/8/17 大光院にて)

ここまでの検証から、格言パネルの展示や、問診票に比べて、手紙の方が有効活用されていると感じたため、月の検証からふたつを廃止し、2.2 で記述した手紙のみで検証を行った。

#### 4.検証 3「手紙で会話」vol.2

検証を重ねた結果、返答ありの手紙形式が周りの人の気持ちを可視化できる最も適切な手法であることが明らかになった。この手法で、「同じ悩みを持つ人が居るという事実を知れた」「これだけの人が悩みを打ち明けているなら自分も相談してみようかな」といった考えに結びつき、少しでも悩みの緩和に繋げることができた。

さらに、年代・性別で分けたシールを制作し、どのような人がどのような気持ちを抱えて生きているのか一目で分かるようにした[図 13]。



図 13 検証の様子(2025/10/28 大光院にて)

また、廃止した 12 枚の格言を新たにアップデートし、散華と正法眼蔵の至言を組み合わせて、参拝者それぞれの思考や好みに応じたお守りを自由に作れるようにした[図 14]。



図 14 検証の様子(2026/1/1 大光院にて)

散華とは、仏を供養するために華を散布することである。元

来は蓮の花びらなど生花が使われていたが、蓮の形をかたどった色紙が代用されるようになった。

正法眼蔵とは、曹洞宗の開祖である道元禅師が 20 年以上の歳月をかけて著した代表的な著作であり、道元思想の集大成とされ日本仏教最高の聖典の一つとして知られている。

#### 最後に

寺院のこれからの役割とこれから社会的にどうあるべきなのかを改めて考察した。

現代の日本は無宗教と言われ、キリスト教やイスラム教に比べて懺悔室のような心の拠り所がなく、人々の関わりが弱い状態となっている。

そこで、現代は医療やカウンセリングなど人の心に寄り添う場所があるが、そこに寺院も加わり、人々の選択肢のひとつとして存在すべきである。歴史的な観点から考えても、寺院は元々病院や学校、役所の代わりに地域を支える場所だった。このような背景もふまえ、もう一度地域の人々の心の拠り所を目指すことが寺院にとっても地域社会にとっても重要だろう。

今回の研究では、対話を最終地点とした 5 段階の「信頼」を得るところまでを目標に検証を重ねてきた[図 15]。



図 15 信頼までの 3 つのフェーズ

興味関心の動機付けとして手紙や格言、お守りを用いて実証をし、再来訪者を増やすことができた。人々にとって寺院とは、仏教とは何なのかをより深く考えながら、寺院と人との距離をさらに縮めるために、修了後も研究を続けていきたい。

#### 引用

- 1)文化庁「宗教関連統計に関する資料集」2021 年

#### 他参考文献

- ・ 舜 法要出張サービス  
<<https://shunobousan.com/kakushuhouyou/>>  
(2025/12/3 最終アクセス)
- ・ 慈光寺 こころの相談室  
<<https://jikouji.teraj.com/counseling/>>  
(2025/12/3 最終アクセス)
- ・ 崇興寺 公式 LINE  
<<https://soukouji.com/悩み相談/>>  
(2025/12/3 最終アクセス)
- ・ 曹洞宗 傑傳寺  
<<https://www.ketsudenji.or.jp/soto03.html>>  
(2025/12/29 最終アクセス)